

(英語版)

(アラビア語版)

令和五年四月

SF小説・「ナクバの東」(八十四) (完)

エピソード (3)

八十四 胡蝶の夢

突然、周囲のすべてが宙に舞い、悲鳴が聞こえ、体が浮き上がる感触を覚えた。どこか遠くから女性の呼びかける声があった。

「お客様、シートベルトをお締めください。」

うたた寝から目が覚めると目の前でスチュワーデスが微笑み返し、もう一度同じ言葉をかけてきた。

「乱気流に巻き込まれたようです。しばらくの間ご不便でしょうがシートベルトを締めてください。何か飲み物をお持ちしましたでしょうか？」

彼は首を振ると、シートベルトの掛けなおした。

窓の外を見ると地平線が白みかけていた。

機内のボードには機体の高度と位置が表示され、現在はイラン南部の上空を西に向かって飛行中であることがわかった。

△このルートは何度も飛んでいるけれど、ここらあたりは気流が安定していて乱気流に巻き込まれるなんてことはなかったはずなのに……▽

△そう言えば少し前にこのあたりの上空で異常な爆発があったとのニュースが流れていたっけ。イスラエルがイラン上空で核を爆発させたなんて言う報道があったけれど、イラン当局もイスラエルも、そして米国も沈黙を守ったままだ。▽

イラン上空を飛ぶME514に偶然乗り合わせただけの平凡な一市民である日本人ビジネスマンの膝の上には雑誌が開かれたままであった。そこにはパレスチナ人の老女と幼い女の子、そして母親の3人の写真があった。

彼はつい先ほどまで見ていた夢を思い出そうとしたが、夢の大半がそうであるように目覚めとともに記憶の外に消えていた。それは胡蝶の夢であったのだろうか。

イラン上空で異変が発生していることを人類は未だ誰も感知していなかった。

核爆発の直後、地球のはるかかなた上空の闇がわずかに振じれた。それはやがて波紋となり周囲に広がり、中心部に穴が開いた。穴は猛烈なスピードで拡大し、周囲の天体は波に巻き込まれ、次々と中心部のブラックホールに吸い込まれていった。それは光速を超える速さであったため、地球からは全く観測することができなかった。

地球が波に飲み込まれるのが数百年先か、数千年先か数億年先か誰にもわからない。その時までヒトが生き延びているかどうかもわからない。宇宙の唯一の存在だけが地球の終末を見とどけることになるのだろうか？

(完)



荒葉一也

(From an ordinary citizen in the cloud)

前節まで：<http://ocinitiative.maedal.jp/EastOfNakbaJapanese.html>